かんだやぶそば

明治13年に団子坂の藪蕎麦の連雀町店を譲り受けて、
現在の神田淡路町で営業を開始。池波正太郎をはじめ、
多くの文人にも愛されている。2013年に半焼したが、
14年に新店舗で営業を再開した。
■千代田区神田淡路町2-10
TEL03-3251-0287／11時30分〜20時LO／水休

みますや

明治38年創業の老舗居酒屋。昭和初期建造の店内は、
連日多くの客でにぎわっている。写真右ページも当店で撮影。
■千代田区神田司町2-15／TEL03-3294-5433
11時30分〜13時30分、月〜金・17時〜23時（22時20分LO）、
土・22時（21時20分LO）／日祝休

し、休みも築地の魚河岸と合わせて、二日、十二日、二十二日の二のつく日だけ。それが昭和三十二年だったかな、高島屋に東京の名のある店が出店したときに、百貨店は毎週休みだからうちもそうしようということで週休制になりました。

西村　藪蕎麦は、庶民の食べ物だった蕎麦の提供スタイルを大きく変えたんですよね。離れとかでゆっくり食べられるようにしたり。

堀田　それは、藪蕎麦発祥の「団子坂蔦屋」がエポックメイキングな蕎麦屋を始めたからです。蔦屋は元武家屋敷で、数百坪という広大な敷地に庭園があり、酒を飲みながらゆっくり蕎麦を手繰る、今でいう料亭のような店でたいへん繁盛したそうです。

森　団子坂の藪は江戸の創業ですが、お土産のつゆは竹筒に入れ、長ネギを切って栓にしていたようです。

――おふたりの神田とのつながりはいかがでしょう。

西村　僕は九州生まれの九州育ちで、大学で初めて東京に来ました。だから、神田のイメージといえば古本屋ですね。大学生が行くのは西側ばかりで、東側の世界は知らなかった。それが、平成八年ぐらいから千代田区の小藤田さんや久保工の久保金司さん（六八ページ参照）と一緒に千代田区の景観づくりに関わる活動を始めまして。それから、いろんな人と話をして、神田のディープな部分を知りました。

森　母が子ども服を手作りしたので、よく須田町の生地屋さんに連れて行ってくれたんです。卸売ですが素人にも売ってくれました。あと東福田町（現・岩本町）に青柳商店という親戚がいました。あのへんは金物商が多かったですね。今も「徳力」さんがあります。

――明治十一年に東京十五区の一つとして神田区が誕生しましたが、同じ神田区でも西側と東側の間に見えない結界線のようなものを感じますか？

堀田　西側の小川町から神保町にかけてはアカデミックな町。もともと東大があった場所だから、学問の町なんです。一方で、うちの店がある東側の淡路町や須田町は職人の町。一日働いてなんぼ稼ぐかという世界で、気風が全然違う。

森　淡路町には共立学校（開成学園の前身）があって、正岡子規や秋山真之が高橋是清に英語を習っていた。高村光太郎の開いた日本初のギャラリー琅玕洞もあったのですから、十分知的な街ですよ。

堀田　東側の淡路町辺りは、江戸時代は武家地でした。それが、明治になっ

堀田康彦
talk by Yasuhiko Hotta

ほった　やすひこ
かんだやぶそば4代目。NPO法人神田学会理事。
1944年東京生まれ。
千代田区立練成（現神田一橋）中学校卒業。
1880年創業の「かんだやぶそば」の
伝統を守りながら、区立小中学区統合、
ワテラス、マーチエキュートといった
再開発事業にも関わるなど、
時代にあった営業展開、
都心の商業・事業継承を提唱している。

森まゆみ
talk by Mayumi Mori

もり　まゆみ　ノンフィクション作家。
1954年東京生まれ。
早稲田大学政治経済学部卒業、
東京大学新聞研究所修了。
84年、仲間とともに
地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊。
2009年に終刊。
著書に『「青鞜」の冒険　女が集まって
雑誌をつくるということ』（紫式部文学賞）、
『神田を歩く』など。
近著に『環境と経済がまわる、
森の国ドイツ』がある。

西村幸夫
talk by Yukio Nishimura

にしむら　ゆきお
東京大学教授、NPO法人神田学会理事長。
1952年福岡市生まれ。
東京大学都市工学科卒、同大学院修了。
96年より東京大学大学院教授、
著書に『都市保全計画』
『西村幸夫風景論ノート』、
編著に『図説 都市空間の構想力』
『まちの見方・調べ方』など。
専門は都市計画、都市保全計画、
都市景観計画など。工学博士。

小藤田正夫・司会
talk by Masao Kotoda

ことうだ　まさお　千代田区役所勤務の傍ら、神田の歴史に精通する歴史家としても活躍。
今回の座談会は、西村さん、堀田さん、森さんと旧知の仲である小藤田さんに司会をしていただいた。（プロフィールは36ページ参照）

石原たきび・構成、文
text by Takibi Ishihara

西側は学問の、東側は職人の町だった。

――神田というと、西側にある神保町のイメージが強いかもしれません。でも、実はかつて町人地があった東側がおもしろくて、個人的に「ディープ神田」と呼んでいます。「東京人」でこのエリアの特集を組むのは初めてだそうですが、まずは皆さんの神田に対する思い入れをお聞かせください。生まれも育ちも神田という堀田さんの原風景は何ですか？

堀田　神田は昔から人がすごくたくさんいましたね。僕は四人兄弟だけど、五人兄弟、六人兄弟なんてざらにいた。今みたいに車も走っていないから、子どもたちの遊び場は道路です。従業員もみんな寝泊まりしていて。ある程度の規模の店になると、婆やが子守をして、女将さんが店を切り盛りするのが一般的でした。

森　やぶそばさんは、明治十三年の創業以来、ずっと御繁盛ですね。商売は女将でもつものですから忙しい。あの「せいろー一枚」という注文を通す声や、「ありがとう存じました」という最後の言葉はきれいな東京の言葉です。

じゃあ、お母さんと食事するどころじゃありませんね。

堀田　食事は交代で食べていました。僕が小さい頃は営業時間も長かった

て民間地になる。淡路小学校と神田小学校は靖国通りを挟んでごく至近距離にありますが、神田小は市場の子どもたちが通う学校、淡路小は勉強しに来る学校という感じで、越境して通う生徒もいました。

森　江戸時代は今の中央通りは御成道、将軍が上野の寛永寺に参詣に行く道で、万世橋は筋違い橋と言って見附もありました。明治五年に見附が廃止され、石造りの万世橋がかかり、眼鏡橋とも言われた。この橋のたもとは東京一の盛り場で、樋口一葉は半井桃水と「武蔵野」という雑誌をつくるとき、「万世橋のたもとで立売すればきっと売れる」と言っています。今の橋は昭和五年ですね。万世橋には広瀬中佐の銅像が建っていて、須賀敦子さんがこれをよく覚えていると高井有一さんと盛り上がっておられました。

――もともとの古い町は中央通りの周辺にあって、新石町や鍛冶町といった町があった。そこに大正八年に開業した国鉄の駅名を「神田」にしてしまった。そして戦後、千代田区が誕生したとき、旧神田区の町に、神田何々町という町名が増えた。知らない人は、古書店街・神田神保町へ行くのに神田駅で降りて行こうとしますよね。かなり遠いのに。

西村　多くの町は線路が大通りに沿っていますが、上野と新橋の間は町と線路が合っていない。東京駅と秋葉原駅をつなごうとすると神田を斜めに通ることになる。

――全国でも既存の市街地をこれだけ斜断したのは神田だけでしょう。

堀田　そういう意味では、鉄道によって変化を余儀なくされたのが、神田ということになります。

――不思議なのは反対運動がなかったことです。市場の人たちが鉄道の重要性をわかっていたのかもしれません。

西村　靖国通り沿いの小川町や神保町は武家地ですよね。

――そう。明治生まれの町で、近隣の御屋敷町の商店街は、市電ができると近郊とつながって繁盛した。でも地下鉄ができた震災後の町は、鉄道と結びついた百貨店の町になってしまった。

堀田　「今日は帝劇、明日は三越」の世界ですよね。

日本文化のスタンダードとなった老舗企業。

――「ディープ神田」というのは、元神田というか職人町というか、いわゆる市場があった古い町を指しますが、そこには当然のように古くから続く老舗も多い。

西村　神田学会の企画で、神田の老舗店主にインタビューをして、創業百年以上の老舗リストをつくったんです。今、百六十軒ぐらいありますが、一番古いのは江戸時代の前、慶長元年に創業した酒蔵の豊島屋でした。

森　ああ、昔鎌倉町にあって、今の猿楽町の。

堀田　白酒を売り出した店ですね。

西村　日本文化のスタンダードを決めた老舗もあります。一つは明治二十三年創業の東京堂書店。ここは本は文化なんだからほかの商品とは違うんだと、再販制度をつくりました。それから、明治二十七年創業のカインドウェア（七三ページ参照）という洋服屋。ここは日本の礼服のスタイルをつくった店です。礼服の白いネクタイって日本だけなんですが、あれは「白いネクタイは汚れやすいから、どんどん売れるだろう」という算段だったみたいです。（笑）

森　なるほど（笑）。ガリ版印刷の堀井謄写堂も大事な会社ですね。

西村　そうです。そして、老舗の数だけを見ると東京は京都より多く、東京のなかでも日本橋に次いで老舗の数が多いのが神田で、龍名館などの老舗宿屋も残っている。そう考えると、細く長く続けることに価値があるという文化が日本にあるんじゃないかと。おそらくそれは職人的な文化も影響しているように思います。

堀田　手広く商売をしてとかじゃなく、家業をコツコツ続ける感じですね。

西村　神田もやはり職人の町なので、そういう文化があったから老舗が多いんじゃないでしょうか。震災や戦災で業態を変えた店もあるでしょうが、ビジネスとしてはずっとつなげてきた。いろんなお店があるでしょ。飲食店もあれば薬屋や菓子屋もあって、すごく多様。鍛冶町では機械工業が発達して、そこに本屋さんが参入して出版業が盛り上がる。

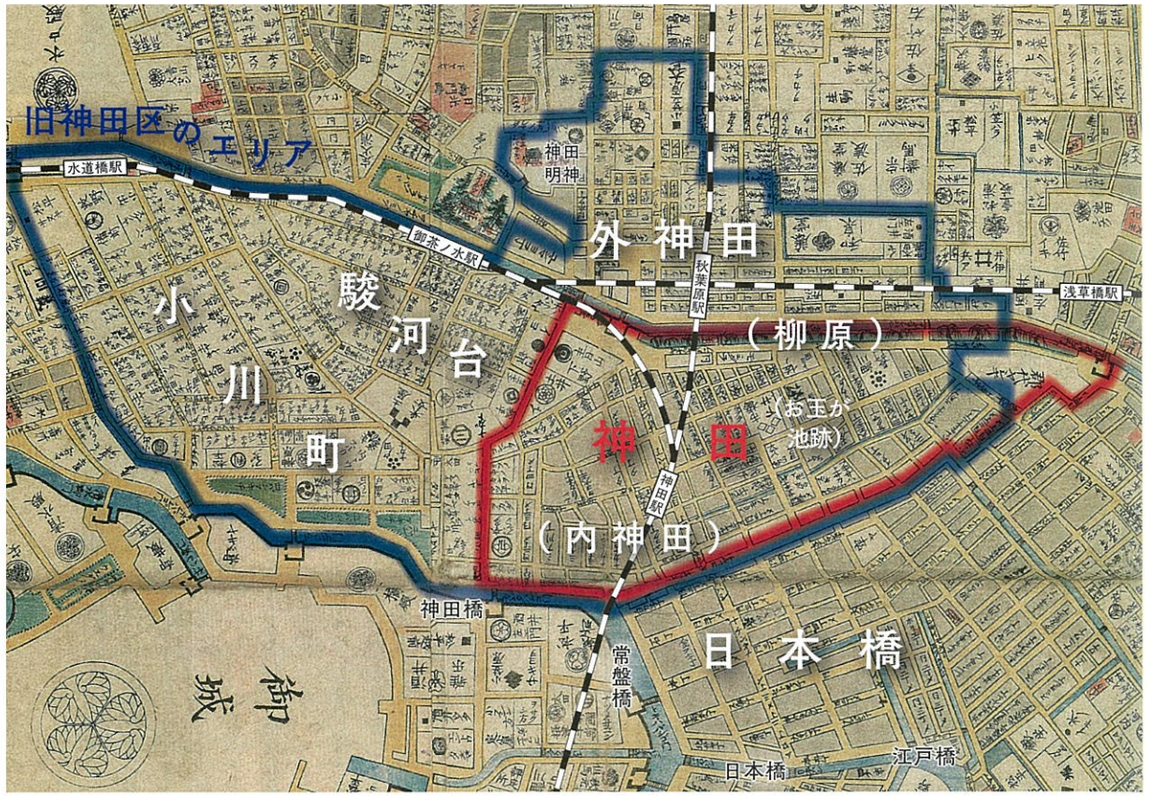
堀田　出版の元は錦絵の印刷で、その版元が神田にはたくさんあった。近代的な出版業の前に、かわら版や錦絵を大量に印刷して市井に流すという出版文化の先駆けになりました。

森　取材した多町の後藤さんは「神田は伝統のある職人町だから、ここで通用したら全国どこでも通用する」とおっしゃっていますね。神田の職人さんは、レベルもランクも高いという自負がある。

西村　僕がおもしろいなと思うのは、長く商売を続けていく戦略についてです。代々受け継がれたオリジナル商品はあるんだけど、さらに別の現代的展開をしようとする店が多い。たとえば紙の専門店、竹尾（九〇ページ参照）。

――竹尾は創業明治三十二年ですね。

西村　紙の品質はキープしつつ、芸術家が使うような専門紙にも取り組む。



『安政改正御江戸大絵図』高井蘭山図（所蔵・国立国会図書館）に、現在のJR線を加筆。
赤枠が江戸時代の神田エリア、青枠が旧神田区エリア、白字はかつてのエリア名。
江戸時代の神田エリアは「寛永年神田全図」に拠る（地図作成・深澤晃平）

さらに江戸時代の文化二年創業の小山弓具（七〇ページ参照）という弓道具専門店も、従来の弓にもこだわりながらグラスファイバー製の弓などの新製品もつくっています。弓道の権威である小笠原流の段位を取ると、ここの弓が授けられるというシステムになっている。

――流鏑馬（やぶさめ）で有名なところですね。

西村　そうです。つまり、小山弓具は小笠原流とともに長く栄える安定のビジネスモデルを構築したんです。

堀田　弓も矢も昔ながらの製品は高いから、普通の人はなかなか買えない。だから、あそこは安いアルミの矢を開発した。伝統的な部分だけでは賄えないから、近代的なアーチェリーとかグラスファイバーの弓とか、そういうものにも手を広げながら商売の土壌を確保していく。

西村　両方のバランスなんですよね。不易流行という言葉がありますが、まさにそれ。本質は忘れないけど新しいものも取り入れるという。

――地元の人に聞いた話なんですが、お祭りではやっていいことと悪いことがあって、それは勉強しなければわからないそうです。要するに、変えていい部分といけない部分がある。

西村　勉強した後は、それを次の代に伝えることでつながっていく。また、「店の伝統や信念を、従業員にも共有してもらうのがすごく難しい」ということは、皆さん口を揃えておっしゃっていますね。

フィールドも、住んでいる人もおもしろい。

森　三階建ての看板建築で有名な柳原通りの海老原商店は、「谷根千」を始めた頃にお祖父ちゃんがすごく応援してくださって。そのお孫さんが今、建物を修復なさっているんです。あと、多町の松本家や後藤家でもお話を聞いたんですが（四四ページ参照）、共通しているのは、皆さん神田を深く深く愛していらっしゃるということ。

――ああ、たしかにそうですね。

西村　「現代版家守（やもり）」も神田から生まれた考え方ですね。空き家を有効活用しようという。

――江戸時代は不在地主が多かったんですよね。神田はあくまでも稼ぐ場所だったから、地主がいない土地には代理人の家守を置いて、地主が連携してタウンマネジメントをしていた。江戸期はそういうシステムだった。

西村　神田は大人の男性が積極的に活動しているイメージがあります。

堀田　たしかに、自分たちのことは自分たちでやろうよという気風がある。お役所はそれを後ろから支えてくれるのが一番いいんだろうと思います。

森　以前、「神田SOBART」というお蕎麦とアートを融合させるイベントもされていましたね。

堀田　あれは息子たちが中心になってやっていたんだけど、要するにアーティストの作品を蕎麦屋に飾ろうと。ところが、アーティストの感覚と蕎麦屋の若旦那の感覚が、なかなか噛み合わなくて、三年ぐらいで終わっちゃった(笑)。ただし、それを機に蕎麦屋の若旦那の集まりができました。

森　ソムリエの蕎麦版、「ソバリエ」も。

堀田　「ソバリエ」は千代田区の江戸開府四百年事業で始めたものです。仕事をリタイアしたシニアの方たちが「やっぱり、神田だったら蕎麦だろう」と。二〇〇三年スタートだから、もう十三年。これまでに千人以上が資格認定を受けました。

森　そういえば、神田にタウン誌ってありましたっけ?

堀田　大屋書房さんが発行している「かんだ」がありますね。都内では銀座百店会の「銀座百点」に次ぐ歴史のあるタウン誌です。

——「KANDAルネッサンス」も長く続いています。

堀田　前身は四十年ぐらい前に久保さんがつくった「内神田通信」です。僕は銀行のゴルフ会で毎回もらっていたのをきっかけに、彼と一緒に活動するようになりました。

西村　すでに百号を超えました。

——すごいアーカイブですよ。あれを読んでいると、神田は本当に知れば知るほどおもしろいと思います。

西村　学生とも神田の震災復興の研究をしていますが、フィールドとして奥深いし、住んでいる人もすごくおもしろいことがだんだんわかってきた。

森　個性的な旦那衆も多いですね。人の心を察する、威張らないいい男が神田には多いです。

西村　歴史は長いんだけど、そこに寄りかかっているわけじゃない。震災、戦災を乗り越えながら、がんばっているのを感じます。久保さんは「地域の工務店としてやっていくには、いかに地域に根づくかが大事だ」と言っていました。単に生活のために稼ぐというだけじゃなくて、町と共存することの重要性を知っているから、地域の活動も進んで行うのだと思います。

人口増に、新たな課題も。

——今、千代田区の人口はだいぶ増えてきましたね。

堀田　バブルの時期は約三万五千人まで減りました。ドーナツ化現象と地価の高騰で都心から人が出て行った。今は盛り返して五万五千人ぐらいです。

森　二万人も増えたんですね。さらに増やすために、足りないものは?

堀田　環境的には震災復興公園という学校と隣り合わせの公園をたくさんつくった。淡路町には複合施設「ワテラス」ができて、なかには学生マンションも入っています。町は役所が考えるんじゃなくて、そこに住んでいる人たちがつくっていくもの。ただ、計画の中に一定の方向性が見えないといけない。方向性というのは、これから先、この町に住む人たちに何が必要かという観点ですね。

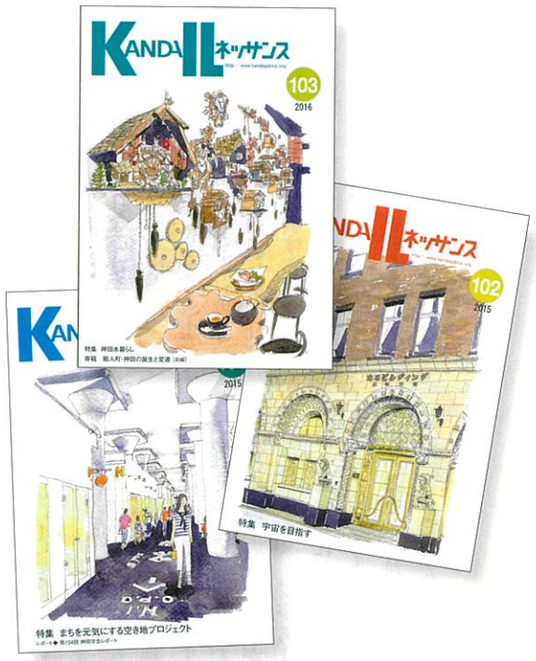
西村　千代田区に人が戻りつつあるということは、新しく来た人と古くから住んでいる人が、どうつながるのかも重要ですよね。

堀田　そうなんです。これは都心の大半の地域に共通する課題です。

西村　新しく来た人もお祭りや地域の行事などで接点を求めたいんだけど、入り口が見つからないのが現状でしょう。

森　もとからの地主さんはビルの最上階に「栄光への脱出」をされて、なかなか出会えなくなりました。スーパーや店屋がなくなり、デパ地下で買い物というのもちょっと暮らしにくい。でも「宿場」とか「かどや」とか地元の人が溜まる居酒屋は不思議とあるんですよね。

西村　そう考えると、神田は地元の人が楽しめる店がけっこう多い。そこがいいなあと思います。



「KANDAルネッサンス」(発行・NPO法人神田学会出版部)
1987年に発足した神田学会発行の、
町の歴史や文化を紹介する地域情報誌。年2回発行。
現在は、株式会社久保工の久保金司さんから引き継ぎ、
堀田康彦さんが発行人を務めている

——あと、神田は都心でありながら裏路地が魅力なんですよ。歩いていてとても楽しい。

堀田　もう二十年ぐらい前ですけど、町の地区計画をつくって、広い道路沿いは高密度利用で高いものを、四メートルや六メートルといった区道エリアは中層、低層の町づくりをしましょうと決めた。何でもいいから高い建造物を建てられるようにしよう、という誘導策をあえて入れなかった。地区ごとの持ち味がないと町の魅力は失われてしまう。

——神田の道路率は震災復興の後で、三三・二パーセントになりました。つまり、三分の一が道路。旧十五区の中で最大の率だった。日本橋より多い。民地内の路地を加えればもっと増える。要するに道路が財産みたいなものなんです。もともとの設計思想でも大手町と丸の内と神田はまったく違いますが、神田の魅力は、多様な道路があることだと思いますね。それは多様な人たちが住めることにつながる。

森　私はこれ以上、昔ながらの商店や食べ物屋が減らないことを祈ります。

吸い上げて吐く、「人間ポンプ」な町に。

堀田　僕はずいぶん前から言っているんだけど、神田は掘割が多いから、それを活かして水辺の町にすればいいと思う。

西村　景観としては、煉瓦づくりの高架下も心が弾みますね。ベルリンの高架設計を輸入して、日本で初めて高架の鉄道網をつくった。

堀田　万世橋の再開発建築は、日本建築学会賞を受賞しました。町の未来を共有する活動に取り組んでいることが評価されました。

——せっかくいい景観があるんだから、自分たちで褒めていかないと。(笑)

堀田　町づくりって、地場から上がってくる要素と西村先生が提唱するようなアカデミックな要素の両方がないとダメ。アカデミックな要素があると、テーマの基本線がはっきりする。

——「神田は人間ポンプ」だと言っている人がいて。つまり、全国から人を吸い上げては吐き出す。出すといっても追い出すんじゃなくて、育ててから外に出す。そういう循環を江戸時代から繰り返してきた。

堀田　その現代版が、「ワテラス」の学生マンションです。最高学府に学ぶレベルの高い学生を集めて、神田のおもしろさを体で覚えてもらう。そして卒業後は全国世界に散って「神田はいいぜ」とアピールしてもらう。百年後には神田のブランドイメージが、グッと上がっていますよ。(笑)

森　そんな深謀遠慮でやっているんですか。(笑)

堀田　まあ規模は小さいんですけどね。三十六室しかないので。でも、倍率は十七倍ぐらいの狭き門です。

——家業としての生業と会社の世界をつなぐのが職人文化なんじゃないかな。神田は人を育てる場所であり続けなくちゃいけないと思います。

西村　本当にそのとおり。なんだか、語りたいことが次から次へと頭に浮かびますね。

森　一回来ただけじゃわからないのが「ディープ神田」ですね。(笑)●

ワテラス

淡路小学校跡の再開発事業により、2013年に竣工。
オフィス、レジデンス、学生マンション、商業施設などで構成され、
近隣で働く人々をはじめ、住民や学生が自由に交流できる、
新しいコミュニティスペースを生みだしている。
■千代田区神田淡路町2-101、105

マーチエキュート神田万世橋

建築家辰野金吾の設計により、中央線の起着点として明治45年に
開業した万世橋駅の遺構を商業施設として再生。建設当初の
階段や、1935年の改築時の階段(写真)も70年ぶりに公開された。
■千代田区神田須田町1-25-4(詳細は84ページ参照)